

熊本大学附属図書館『平成28年熊本地震』業務記録』公開までの経緯と現在の状況

濱崎千雅

1. はじめに

平成28(2016)年4月14日以降、震度7や6強を観測する地震が相次ぎ、熊本大学附属図書館は多大な被害を受けた。附属図書館では、約1か月半にわたる復旧への取り組みをまとめ、『平成28年熊本地震』業務記録』(以下「業務記録」という。)を平成29(2017)年3月に公開した。

業務記録は前震発生の翌日に「図書館の被害と復旧作業の様子について写真や文章で残すように」と図書館課長から指示があり、職員全員で記録を残すことに努めたものである。当初、前震の被害のみを想定しており、数日で終了予定であったが、4月16日未明に発生した本震により被害はさらに拡大し、記録も継続することになった。

今回の報告では、業務記録公開までの経緯とその後の状況について述べる。

2. 熊本大学附属図書館の概要と被害

熊本大学は、熊本市中央区に三つのキャンパスを持ち、七つの学部と10の大学院からなる国立の総合大学である。それぞれのキャンパスに、中央館・医学系分館・薬学部分館を設置している。

(1) 中央館

黒髪キャンパス(文学部・法学部・教育学部・理学部・工学部)に置かれ、昭和48(1973)年に竣工した本館(地上1-2階・地下1-2階)と、平成18(2006)年に増築した放送大学との合築棟(地上1階、地下1-2階)で構成される。本館は、平成24-25(2012-2013)年に耐震補強と学修環境の充実を目的とした大規模な改修工事を実施し、書架は地震対策を講じていた。本震では想定外の振動で大量の資料が落下し、側面の壁に固定していたアンカーも外れたが、書架は床面も固定していたため倒壊やゆがみはみられなかった。施設面は、壁にクラックが無数に入ったものの、構造上の問題はなく学内でも安全な建物として認識された。

(2) 医学系分館

本荘・九品寺キャンパス(医学部・附属病院)に

置かれ、平成21(2009)年に竣工した医学教育図書棟の地上1-2階と地下1階部分を使用している。本学図書館の中では最も大きな被害が報告され、閲覧室の固定書架倒壊、電動集密書架のゆがみやレールからの脱線がみられた。地下書庫の固定書架もゆがみがひどく、余震が多発したことも影響し、安全の面から長期の立入禁止措置を余儀なくされた。地下書庫は平成28年度に引き続き、平成29年度も復旧工事が行われた。

(3) 薬学部分館

大江キャンパス(薬学部)に置かれ、昭和63(1988)年に竣工した大学院実験研究棟(地上3階)内の1-2階を使用している。被災後、資料の落下被害とともに、集密書架のゆがみが確認されたが、早期の復旧工事により対応できた。

3. 図書館サービス再開への復旧作業と記録

5月2日、中央館は被災後2週間ほどで、1階ラーニングcommonsの利用サービスを再開した。9日の授業再開に伴い、復旧作業の進捗や安全面を考慮しつつ、利用サービスを順次拡充させた。頻発する大きな余震の中で、利用者の安全を確保できるのか不安視する声も出たが、学生へ自主学修の場を提供することを優先し、ヘルメットの設置や危険と思われる場所への立入禁止措置で対応した。

写真や文章による記録を残すことに努めていた反面、映像記録の保存ができなかったことが反省点として挙げられる。前震発生時に中央館は開館しており、防犯カメラも作動していた。カメラには利用者の行動や書架から落下する資料の様子がリアルに記録され、前震翌日の4月15日には映像を確認できていた。映像の保存は後日行うことにしていたが、16日未明に本震が発生し、前震をはるかに上回る被害の復旧作業に多忙を極めた。その結果、地震発生時の映像は設定により上書きされてしまい、保存することができなかった。

4. 記録保存と公開

6月下旬、震災資料収集のため震災記録ワーキンググループを発足させた。既に先達の図書館職員の活動について調査しており、震災資料の散逸を防ぐためには、早期に活動を開始する必要があった。7月14日に当館ホームページで震災資料の提供を呼びかけ、熊本日日新聞にも活動が報じられた。被災から半年後の10月14日に「熊本地震ライブラリ」として収集資料の館内展示と、熊本地震関連リンク集のweb版を公開した。web版は、熊本地震について報告集等を公開している機関を集めたものである。「熊本地震ライブラリ」は、現在も活動を継続している。

図書館職員が各自で記録した文章や写真を、業務記録として取りまとめる作業は、11月下旬より開始した。一般公開を見据えて、担当ごとに時系列で整理し、文面の統一、レイアウトの調整、写真・図表等の挿入を数名の職員が検討した。撮影された写真データは大量に保存されていたが、各人がそのつど関心のある場所で撮影した写真が多いことが判明した。業務記録に掲載する写真を選定する段階で、定点観測の重要性を改めて痛感することになった。その後、重複する内容削除や文体の統一等の作業を行い、平成29年3月に業務記録を熊本大学学術リポジトリでweb公開することができた。

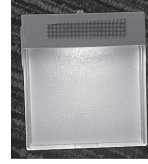
5. 現在の状況

前震は本震と比較すると資料の落下は少なく、導線が確保されていたため、利用者は混乱することなく避難することができた。しかし、本震では大量の資料が落下し導線が塞がれた。深夜の発生であったことから幸いなことに利用者も職員も不在であったが、復旧作業の当初から導線確保を検討し、落下防止装置だけでは不十分であると考え



◀ 1. 本の海となった書架の通路

▼ 2. 書庫利用証とホイッスル



◀ 3. 保安灯
(常設→コンセントから外すと点灯)

て書架高所への配架を控えるなどの対策を講じている。

余震の対策として、各フロアに余震時の行動について日本語・英語とピクトグラムを併記した掲示を行い、利用者へ注意を促した。避難経路を確保するために複数箇所へ保安灯を設置した。特に、地下書庫への入庫は人数把握等の管理に加えて、利用者へ書庫利用証と一緒にホイッスルを渡している。

医学系分館・薬学部分館は、新たな地震対策として一部の書架に免震装置を導入した。

6. おわりに～記録を未来へ繋ぐ～

平成29(2017)年9月に、熊本県大学図書館協議会・職員研修会を九州地区大学図書館協議会の後援を受けて、当館が開催した。「東北大学附属図書館が遭遇した東日本大震災」について基調講演があり、熊本県内の大学図書館の被害を3大学が発表した。熊本地震に関する意見交換も行われ、経験や知識を共有することにより、県内外からの参加者は防災に対する意識を深めることができた。

本学図書館は業務記録として熊本地震直後の対応を残し、オープンアクセスの公開を積極的に取り組むことができた。編集時には読み手の期待に応える内容となっていないとの意見もあったが、公開後に寄せられた意見から、記録を未来へ繋ぐことが最も重要であることを再認識した。また、業務記録を目にした県外の図書館関係者から、被災経験・復旧対応・資料保存等について発表する複数の機会を設けていただいた。この場を借りて謝辞を申し上げる。

参考文献

- ・澤田敬 『平成28年熊本地震』業務記録』熊本大学附属図書館、2017.3. <http://hdl.handle.net/2298/36463> (参照:2018.1.15)
 - ・川内野祐子 『熊本地震からの図書館復旧』『Better Storage』Vol.206, p1-4, 2017.7.
 - ・笠彩子ほか 『地震から得た学び：震災時に取るべき図書館職員のアクションとは何か』『PASSION』Vol.38, p.12-15, 2016.11. <http://hdl.handle.net/2298/35801> (参照:2018.1.15)
- (はまさき ちか：熊本大学附属図書館)
[NDC10：017.7 BSH：1.熊本地震 2.熊本大学附属図書館]